



Title	捨てられる資料たち
Author(s)	持田, 誠
Citation	きぼうの虹, 326: 7-7
Issue Date	2010-01-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/42821">http://hdl.handle.net/2115/42821</a>
Type	column
Note	総合博物館へ行こう. 第4回.
File Information	mochida_kibou326.pdf



[Instructions for use](#)

建物の建て替えや改修工事の際に危惧されるのが、北大の歴史を刻んできたさまざまな備品や道具の運命だ。廃棄処分される品々の中には、北大史を振り返る上で、また科学や技術、大学教育の歩みを考える上で、とても重要な資料となるものが含まれている。人知れず消え去っていくそうした資料たちを、遺し伝えていくのも博物館の役割だ。



写真1 農学部畜産学科から移管された電気孵卵器

引き取りの打診があり、移管されてきた。孵卵器とは、ニワトリなどの有精卵を人工的にヒヨコへ孵すために温度を調節する機械。畜産学の研究に不可欠の道具だが、研究の発展の蔭には孵卵器そのものも発展がある訳で、その歩みを示す生き証人とと言える。現在、館内で適当な展示箇所が無い為に残念ながら公開されていないが、いつかきつと畜産学史や産業史を考える上で、大いに役立つ日がやって来る



写真2 水産練習船の六分儀

にちがいない。写真2は六分儀。六分儀とは、船が航海をする際に、天体などから自らの位置を確認するために用いる測量器具で、これは水産学部の練習船で用いられたものである。数年前に廃棄されていたが、当館のボランティアが救出して、分館の水産科学館へ収蔵した。航海技術の発展を示す大切な資料であると共に、この六分儀には水産学部独特の歴史が刻まれている。それは「函館高等水産学校」の銘板が貼られていることだ。水産学部には、かつて北大の所管を離れていた時期があり、この六分儀はそうした時代の練習船で実際に用いられていたことを示している。このように、ひとつの資料でもさまざまな角度から歴史を見ること

# 総合博物館へ

## 行こう

### 第4回

### 捨てられる資料たち

総合博物館  
研究支援推進員

## 持田 誠



写真3 捨てられる図書や文書資料たちの山

が出来るのである。孵卵器や六分儀は、廃棄を逃された好例だ。しかし、そうした運命を辿る資料の方が少ないだろう。写真3は、農学部改修工事期間中のある日の文書廃棄庫の様子。山のように積まれた書籍や文書が、廃棄庫に入りきららずに外にも山積みされ、雨に打たれてポロポロになっていた。改修工事や移転の際、簡単に廃棄してしまう資料のひとつが図書や文書類だ。登録された図書は、学内に同じ図書が無いかを確認の上で廃棄処理されるのが通例だ。しかし、もつとも危険なのは、研究者が個人で購入したり寄

贈され、登録されずに長い間保管されてきた図書。これらは、研究者が世代交代した際に「もう必要の無い余計なもの」と扱われ、簡単に捨てられてしまう。しかし、こうした図書にも、現存数の少ない貴重なもの、札幌農学校時代の書き込みや蔵書印などが押印され、歴史資料としての価値が高いものなどが含まれている。文書類も同様で、研究室の日常の記録や、手紙・写真類が挟まれている場合があり、そのまま廃棄してしまうことで失うものはあまりにも大きい。こうした廃棄資料は、専門家によって捨てて良いもの、遺すべきものを選別する機会が欲しい。また、たとえ北大で重複所蔵している図書でも、地域の博物館などでは喉から手が出る程欲しいと思っっている場合があり、交換や寄贈に使えるものは選別したい。しかし、現実的には時間と場所の制約からそれが出来ない。ここに苦悩があるのだ。資料の保存に悩みは尽きない。しかし悩みつつも、大学の博物館の存在価値はこうしたときにこそ発揮されるものである。図書館や大学文書館とも手を携え、これからも学問と北大の歴史をモノで遺し伝えていくために、力を発揮していきたいものである。